



赤穂二年十月廿六日  
建春門院北面歌合

力千七百二  
印青本

3121



4  
4  
3/21

安井版道知唯后真流  
走春門流北面  
于合



建春門院小面方合

嘉慶二年十月十六日

題

園路落葉水鳥巡馴

陳朝遠題

作者

左方

右方

按定以便通郡

皇居宮左史後成

前大納言美房

侍中寺重家以

指大納言隆季

信輔知臣

指大納言美房

左中將美家

左侍内侍美房

左中將美家

右大舟美徳

右中舟美守能長

左舟舟脩範能長

教位成方能長

教位木平廣

右少舟陸房能長

右馬指以陸信

右少舟通親能長

勅旨由公友親宗

伊豆守仲徳

判者

皇居宮内省後成

一番 國語落家

左

按察使公通卿

越前守能長之判者由公通卿能長

右

皇居宮内省後成

右舟舟美守能長

右舟舟美守能長

右舟舟美守能長

右舟舟美守能長

右舟舟美守能長

可成なる事ありしに人ともあらず  
其もまた左なりといふ様にして  
一番のし海にふけられ美とす  
さかへあお引しやと書し

二番

左

美明言実定に

山風浦にすすめりていづとす  
百次方の書

右

傳中古事記に

繁するゆは風波にけり  
し浪の美

左のうゝいすこと  
浪にけり書し

いとおもひに  
下りてくさるる  
すく言美よりけり  
実かたは  
かきし  
みさし  
左を勝とん

三番

左

権大納言隆平

お色の浪れ  
お色の浪れ

右

清補

流のくし羅ふこくせりは清々い出のき指し風あり  
左き城のくし羅ふこくせりは清々い出のき指し風あり  
のき指し風あり  
良選法師の印の事いしきりたる事  
自然のくし羅ふこくせりは清々い出のき指し風あり  
こくせりは清々い出のき指し風あり  
いしきりたる事  
せきの岩のくし羅ふこくせりは清々い出のき指し風あり  
さふりくし羅ふこくせりは清々い出のき指し風あり

四番

左

撞大納言実房の

まの右羅ふこくせりは清々い出のき指し風あり  
さふりくし羅ふこくせりは清々い出のき指し風あり  
山あはれは清々い出のき指し風あり  
作しきりたる事  
あはれは清々い出のき指し風あり  
あはれは清々い出のき指し風あり

右

右中ね美家

清々い出のき指し風あり  
道とせし羅ふこくせりは清々い出のき指し風あり

左の心言ふことばは此の他一葉の舟を  
常々事なすことばは此の他一葉の舟を  
すま舟木の葉と称しん事やいふと少  
るも此の舟は此の舟は此の舟は  
この心言ふことばは此の他一葉の舟を  
をいふことばは此の舟は此の舟は  
よめをいふことばは此の舟は此の舟は  
いふことばは此の舟は此の舟は

五番  
左

右 結實圓つ

右 結實圓つ

右

左 結實圓つ

右の心言ふことばは此の他一葉の舟を  
常々事なすことばは此の舟は此の舟は  
すま舟木の葉と称しん事やいふと少  
るも此の舟は此の舟は此の舟は  
この心言ふことばは此の舟は此の舟は  
をいふことばは此の舟は此の舟は  
よめをいふことばは此の舟は此の舟は  
いふことばは此の舟は此の舟は

あふし目教り下しやうく高井の宮  
宿連の侍うらんことしうらん  
ゆふふは右らんことしうらん

六番

左

左大弁実澄船長

風吹逢坂山に雲ふ其教り  
しうらん宮しうらん

右

右少将隆房船長

逢坂山に雲ふ其教り  
しうらん宮しうらん

左大弁実澄船長  
しうらん宮しうらん

しうらん宮しうらん  
しうらん宮しうらん

岡守多あふし目教り  
しうらん宮しうらん  
しうらん宮しうらん  
しうらん宮しうらん  
しうらん宮しうらん  
しうらん宮しうらん

七番

左

右中將実守船長

雲ふ其教り  
しうらん宮しうらん

右

右馬指从隆信

ゆふふは右らんことしうらん  
しうらん宮しうらん





右

執事由は親宗

御宗此より通井の對行し其の申の白  
 左安堵の氣はらふ事由先し不破の  
 實をなすやと申事かゝる右  
 志の申の白川乃美と申心はあ  
 しまり申事此の業をなすに  
 申事かゝるや少耳と申る人とは  
 申事かゝる一番の法をいふ事か  
 申事かゝる事と申事かゝる事か  
 申事かゝる事と申事かゝる事か

十番

右

教位季廣

かく申事あらはし申事かゝる事か  
 右  
 御宗此より通井の對行し其の申の白  
 左安堵の氣はらふ事由先し不破の  
 實をなすやと申事かゝる右

業一何... 題... 文字の... 指... 左... 右...

一番 水鳥近馴

左

按察使云通

の... 左... 右...

右

皇... 左...

悪... 左... 右...

左... 右... 持... 事... 持... 事... 持... 事... 持... 事...

水乃ふしとて事也又玉といふ事ハ何  
をもかじる時の事とてしみるを色  
結りて成るまづれと詞もなみ中  
ちと後をまよとて事ありては人  
乃江に一とて事なりとてやなは  
あるしとて事とてかゝりて持する  
ありてとて事とてはくは

二番

左

お大納言

鳥とりとて事の本とて事とてはくは

右

宮内

池をとて事とて事とてはくは  
左のうとて事の本とて事とてはくは  
をよあちりしとて事とてはくは  
わらとて事とて事とてはくは  
由人ともとて事とてはくは  
乃うまとて事の本とて事とてはくは  
しとて事とて事とてはくは  
しとて事とて事とてはくは



心へつ詞清し又せんか御書ししうしうし  
よくて侍もすうれ下らうし勝負  
あふまぬし御書に言ひしうし  
自んあつしうしうしうしうし  
ふうしうしうしうしうしうし  
一宮侍也

昔

左

左馬場書圖

ふれ池玉のうをかひあまやうし毛部

右

松政

千と千のうのう果入のうとてく持し

左のうのうすうしうしうしうしうし  
衣あつしうのうかた毛部  
髪あつしうのうし難しう事うのうし人  
侍しうしうしうしうしうしうし  
あ毛と衣しうしうしうしうし  
賤部しうしうのうあつしうのうし  
侍しうし又文うしあつしうし  
いへり又あつしうの中しうし

こゝの筆とあるは、腕の毛をあらうと  
かきあらうと云ふに、毛をあらうと云ふ  
詭に、留めたる、右の下の、  
は、果てしなく、わづらひ、  
わづらひ、わづらひ、わづらひ、  
其文字、下、上、  
は、右、端、と、云ふは、

### 六番

左

彦太舟 美海

舟とし、  
彦太舟 美海

右

隆房船

岸と、  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海

### 七番

と

寶守船

彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海

右

隆信

彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海  
彦太舟 美海

左の詞やいふも亦たよきものなり  
とすらぬまじしよといふもよきものなり  
しよといふもよきものなり  
しよといふもよきものなり  
しよといふもよきものなり

八番

右

脩の祀

言解舟の御舟なりがしよといふもよきものなり

右

通親

めがねの鴨の御舟なりがしよといふもよきものなり

左の詞やいふも亦たよきものなり  
とすらぬまじしよといふもよきものなり  
しよといふもよきものなり  
しよといふもよきものなり  
しよといふもよきものなり

九番

右

盛方

浪枕の御舟なりがしよといふもよきものなり

右

親宗

池の御舟なりがしよといふもよきものなり  
とすらぬまじしよといふもよきものなり  
しよといふもよきものなり  
しよといふもよきものなり  
しよといふもよきものなり



ふる毛衣のひあつしうらたをのぬ風  
打へるひもあつる下へくし目さる  
〜又ひかゝるぬせりあまやと又  
為持

十番

左

季廣

目を強はくぬかひしう若鴨のうら毛衣をいふ

右

仲經

う海人のひるあつしうらたをのぬ風  
左のしうらるるあつしうらたをのぬ風

ま川とぬあつしうらたをのぬ風  
いふあつしうらたをのぬ風  
臨期遠約急

一番

左

探察使

ほりしうらぬあつしうらたをのぬ風  
右  
白浪高き後成り

あまやちぬあつしうらたをのぬ風  
左のしうらぬあつしうらたをのぬ風  
いふあつしうらたをのぬ風

右の音のよきとてさうしつとく  
いふこといふこといふこと  
右の音のよきとてさうしつとく

二番

左

あちの音のよきとてさうしつとく

右

新三位重家

左の音のよきとてさうしつとく  
いふこといふこといふこと  
右の音のよきとてさうしつとく  
いふこといふこといふこと  
あちの音のよきとてさうしつとく

三番

左

あちの音のよきとてさうしつとく

右

清輔朝臣

流布く、いふこといふこといふこと  
神はく、いふこといふこといふこと  
あちの音のよきとてさうしつとく  
いふこといふこといふこと  
右の音のよきとてさうしつとく  
いふこといふこといふこと





つ井も... 陸信

右

元文... 乃句... 今... 也... くと... と...

八番

左

脩能船后

飛鳥川... 昨日...

右

通親船后

い... 左の... 女... 母... 玉章... 但左也...

九妻

左

盛方親直

松川のあひらきつねりおのふり書くを公家也

右

親宗

うらぬきおのふり書くを公家也

右の婆記おのふり書くははく松川の

言ふおのふり書くははく事つたははく

右は三の末おのふり書くははく上のおや

おのふり書くははくははくははくははく

おのふり書くははくははくははくははく

やまの勝中戸印也

十番

左

幸廣

照月のおのふり書くははくははくははくははく

右

仲細

世書をおのふり書くははくははくははくははく

右の婆記おのふり書くははくははくははく

右のおのふり書くははくははくははくははく

おのふり書くははくははくははくははく

おのふり書くははくははくははくははく

本云

和歌

付中僻字習多<sup>ク</sup>間不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>意事在<sup>レ</sup>也  
先中<sup>ノ</sup>終不<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>也

付言各<sup>ノ</sup>右奥書本字<sup>ノ</sup>以外難<sup>ク</sup>見分事亦  
多<sup>ク</sup>寫本<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>本<sup>ノ</sup>終<sup>レ</sup>寫<sup>レ</sup>也  
今少<sup>ク</sup>加<sup>レ</sup>り<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>愚推書<sup>レ</sup>作者不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>有<sup>レ</sup>  
<sup>レ</sup>め<sup>ト</sup>書<sup>カ</sup>レ<sup>ル</sup>傍<sup>ニ</sup>注<sup>ス</sup>中<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>古<sup>ノ</sup>也

考長三年<sup>戊</sup>仲秋三<sup>ノ</sup>也<sup>是</sup>子素統<sup>ノ</sup>同  
十六<sup>ノ</sup>朔<sup>ノ</sup>禱<sup>ノ</sup>合<sup>ノ</sup>由<sup>ノ</sup>推<sup>レ</sup>分<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>朱<sup>ノ</sup>在<sup>レ</sup>付<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>宗  
審<sup>ニ</sup>又<sup>レ</sup>件<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>古<sup>ノ</sup>筆<sup>ノ</sup>平<sup>ノ</sup>跡<sup>ノ</sup>優<sup>ニ</sup>美<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>百<sup>ノ</sup>假<sup>ノ</sup>必  
遠<sup>ニ</sup>亦<sup>レ</sup>近<sup>ニ</sup>代<sup>ノ</sup>相<sup>ノ</sup>遠<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>隨<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>也<sup>本</sup>寫<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>平

天和二<sup>ノ</sup>四月<sup>ノ</sup>也<sup>孤</sup>去<sup>レ</sup>斬<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>字<sup>ノ</sup>也

其<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>隨<sup>レ</sup>多<sup>ク</sup>不<sup>レ</sup>審<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>附<sup>レ</sup>事<sup>ノ</sup>也





